春龍神
船橋
源氏供養
花筐
富士太鼓
西

特116
702

始

宗家觀世左近

特116
702

春日龍神

内十四巻ノ一

概說

栂尾の明恵上人入唐渡天を思ひ立ち、春日明神へ御暇乞の参詣しけるに、宮守の老人出會ひ、當明神は上人と笠置の解脱上人とを左右の眼、兩の手の如く思召し頼み給ふなれば、入唐渡天のこと神慮にかなひ申すまじ、のみならず明神は衆生済度の為め鎮座あらせらるれば、天竺の靈鷲山も春日山に異る処なからんと説き立てしに因り、上人は日本を去ることを断念し、宮守はさらば奇特を見せんとて姿を隠せしが、やゝありてさまじなる下界の龍神出現して、釋迦の誕生、伽耶の成道、鷲峯の説法、雙林の入滅に至るまで悉く見せ、龍神は猿澤の池中に入りけり。

大正
10. 3. 15
内交

此曲前半ハノドカニ謡ヒ後ハ強ク進ンデ抜ケヌ様謡フベシ

小書　龍女ノ舞

役	別	装束附
ワキ	明恵上人	角帽子　着附熨斗目　白大口　紺水衣　腰帯　珠数　扇
ワキツレ	従者二人	角帽子　着附熨斗目　白大口　縷水衣　腰帯　珠数　扇
前シテ	宮守ノ翁	面小牛尉(又ハ阿古父尉)　尉髪　翁烏帽子　着附小格子　白大口　縷狩衣　紋附腰帯　尉扇　指萩箒
後シテ	龍神	面黒髭　赤頭　龍戴　赤地金段鉢巻　着附厚板　法被　赤地半切　紋附腰帯　打杖

季	三月	曲柄	五番目(晷脇能)
所	大和國奈良春日神社	稽古順	二級

春日龍神

世阿彌元清作

ワキ僧　ワキツレ二人　次第上　拍子ニ合

月の行方もそなたぞと。月の行方もそなたぞと。日の入る國を尋ねん

ワキ詞　これは栂の尾の明慧法師にて候。われ入唐渡天の志あるにより。御暇乞のため春日の明神にまゐらばやと思ひ候。唯今南都に下向仕り候

道行三人上　[illegible]

樒が原をよそにみて。樒が原をよそ
にみて月にあらびの峯の松。緑の
空も長閑なる都の山を跡にみて
これも南の都路や。奈良坂越えて
三笠山春日の里に着きにけり春日の
里に着きにけり

シテ一セイ
晴れたる空に向へば。和光の光。あら
たなり　それ山の動きなき形を現して。
古今に至る神道を表し。里の平安
の衛をみせて人間長久の聲滿てり。
然るに名も久方の。天の兒屋根の代々
とかや

下哥
月に立つ影も鳥居の二柱

○小謡
上哥
御社の誓もさぞな四所の誓も
さぞな四所の神の代よりの末うけて。

澄める氷室の御影まで塵に交はる
神心三笠の森の松風も枝を鳴さぬ
氣色かな枝を鳴さぬ氣色かな

ワキ カヽル「いかにこれなる御奴に申すべき事の候

シテ「や。これは栂の尾の明慧上人にて御座候
ぞや。唯今の御参詣さてこそ神慮に嬉しく
思しめし候らん

ワキ ウケテ「さん候唯今参詣申
す事余の儀にあらず。われ入唐渡天
の志あるにより御暇乞のために唯今参
りて候

シテ カヽル「これは仰にて候へどもさすがに
上人の御事は。年始より四季折々の
御参詣の。時節のすこし遅速をだに。
待ちかね給ふ神慮ぞかし。されば上人
をば太郎と名づけ。笠置の解脱上人

をば次郎と頼み。双の眼両の手の如く
にて。昼夜各参の擁護懇なるを
こそ承りて候に。日本をさり入唐渡
天し給はん事。いかでか神慮に叶ふべき。
ただ思し召しとまり給へ　ワキ　げにげに
仰はさる事なれども。入唐渡天の
志も。仏跡を拝まんためなれば。何か

神慮に背くべき　シテ　それは仰ども覚えぬ
ものかな。仏在世の時ならばこそ。見聞
の益もあるべけれ。今は春日の御山こそ。
即ち霊鷲山なるべけれ。その上上人
初参の御時。奈良坂のこの手を合せて
（拍子三合ハズカミル上）
禮拝する。人間は申すに及ばず心なき
○小謡　拍子三合
上哥　同　ウケテ朗カニ
三笠の森の草木の。三笠の森の草

末の風も吹かぬに枝を垂れ。春日山野
邊に立つ鹿までも。皆悉く出で
向ひ。膝を折り角を傾け上人を禮拜
する。かほどの奇特をみながらも眞の
浄土といひつべし。御渡唐の望のはて
しある心や。返すがへす頼む。
神のままにて止りて神慮をあがめ

たはりませ神慮をあがめたはりませ、、ませ。

ワキ詞

猶々當社の御事委しく御物語り
候へ。然るに入唐渡天といつぱ。
佛法流布の名をとめし古蹟を
尋ねんためぞかし。天台山を拜む
べくは比叡山にまゐるべし。五臺山の
望あらば吉野筑波を拜すべし

○サシ曲独吟

昔は霊鷲山。今は衆生を度せんとて。大明神と示現してこの山に宮居し給へば　即ち鷲の御山とも。春日のお山とも拝むべし　われわれと知れ。釈迦牟尼仏世に出でゝさやけき月の雲を照すと云ふの御詠もあらたなり。然れば擁護ある慈悲萬行の神徳の。

迷ひを照す故なれや。小機の衆生の益なきを。悲み給ふ御姿。瓔珞細軟の衣をも脱ぎ麁弊の。穀衣を着しつゝ。四諦の御法を説き給ひし鹿野苑もさなれや。春日野に。起き臥すの鹿の苑ならずや　その外当社の有様の。山は三笠に影さすや。

さる日そあらたに現れて誓を四方に
春日野の。宮路も末あるや曇
なき西の大寺月澄みて光ぞ増る
七大寺佛法の花も八重櫻の都とて
春日野の末までのどけかりけれ。

ワキ詞 げに有難き御事かな。即ちこれを
御神託と思ひ定めてこの度の入

唐をば思ひとまるべし。さてさて
御身のやうなる人ぞ御名を名
告り給ふべし

シテ 入唐渡天をとゞ
まり給ふこそ三笠の山又五天竺を寫
し。摩耶の誕生伽耶の成道鷲
峯の説法雙林の入滅まで悉く
見せ奉るべし暫く待ち給へと。

木綿四手の神の告。われ時風秀行ぞとて。かき消すやうに失せにけりかき消すやうに失せにけり

中入間

ワキ上ゲ三人
待謡
○切迄囃子○

神託にあらたなる。神託にあらたなる。聲の内より光さし。春日の野山金色の。世界となりて草も木も佛體となるぞ不思議なる佛體となるぞ不思議なる、

上地
早笛
後シテ龍神出

時に天地。震動するは。下界の龍神の參會か。すは。八大龍王よ

地
難陀龍王。跋難陀龍王。娑伽羅龍王和修吉龍王。徳叉迦龍王。阿那婆達多龍王。百千眷屬引き連れ引きつれ。平地に波瀾を立てゝ。

佛の會座に出來して。御法を聽聞する。その外妙法緊那羅王。又持法緊那羅王。樂乾闥婆王。樂音乾闥婆王。婆稚阿修羅王。羅睺阿修羅王の。恒沙の眷屬引き連れ引き連れ。これも同じく座列せり。龍女が立ち舞ふ波瀾の

袖。龍女が立ち舞ふ波瀾の袖。白妙なれや。わだの原の。拂ふ白玉立つ緑の。空色も映る海原や。沖行くばかり。月の御舟の。佐保の川つらに。浮み出づれば。

○獨吟仕舞○

八大龍王は。八つの冠を傾け。所は春日野の。月の三笠の雲に上り。飛

火の野守も出でゝ見よや。摩耶の
誕生。鷲峯の説法。雙林の入滅。
悉く終りてこれまでなりや。明恵
上人さて「入唐は。ワキ「とまるべし
地「渡天はいかに。ワキ「渡るまじ。地「さて
佛跡はいかに。ワキ「尋ねまじや。同「尋ねても
尋ねても。この上あらじの雲に

乗りて。龍女は南方に飛び去り
行けば。龍神は猿澤の池の青波
蹴立て蹴立てその丈千尋の
大蛇となつて天に群がり地に蟠
りて池水をかへして失せにけり。

船橋

概説　内十四巻ノ二

萬葉集の歌に「上野や佐野の船橋とりはなし親しさくれど我はさかれがへ」といへるがあり。之に就き後世の俗説に、昔此佐野の里に住みける男、忍び妻にあこがれ、川を隔て、夜な〳〵通ひけるに、二親此の事を深く厭ひ、橋の板を取放し置きしを、夢にも知らず打渡りしかば踏みはづし、水に溺れて空しくなりけりといふ。此男女の靈旅僧に現れ、其當時の様など語り、法味を得て妄執を晴らし、成佛の身となりけり。

此曲ハ浮キ立ツヲ好マザルナレドモ重キニ非ズ幾分凄味ヲ含メテサラリト謡フヲ宜シトス

役別	裝束附
ワキ　山伏	兜巾　篠懸　着附厚板　水衣　白大口　腰帯　小刀　男扇　莿高珠數持
ワキツレ　山伏二人	兜巾　篠懸　着附厚板　水衣　白大口　腰帯　小刀　男扇　莿高珠數持
ツレ　里女ノ靈	面連面　鬘　鬘帯　着附箔　唐織着流シ
前シテ　里男ノ靈	着附段熨斗目（又無地ニモ）　白大口　掛素袍（水衣ニモ）　縫紋腰帯　男扇
後シテ　里男ノ靈	面淡男（千種男ノ類）　黒地金段鉢巻　黒頭　着附段厚板　白大口（又ハ紺、浅黄、花色類ノ大口又ハ半切ニモ）　縫紋腰帯　扇　打杖持

季	三月	曲柄	四番目（畧二番目）
所	上野國群馬郡佐野村	稽古順	三級

船橋

世阿彌元清

ワキ山伏　ワキツレ二人　次第上　拍子二合

山又山の行く末や。山又山の行く末や。雲路のしるべなるらん。

ワキ詞　これは三熊野より出でたる客僧にて候。われまだ松島平泉を見ず候ふ程に。この度思ひ立ち松島平泉へと急ぎ候。

道行三人上　白雲の渡りの野州の川瀬

漸く渡りの野洲の川。かの織女の
契待つ年に一夜のあだ夢の。醒が
井の宿を過ぎ。伊吹颪の音に
のみ又月の霞むや美濃尾張。老を
知れとの心かな老を知れとの心かな

ワキ詞「急ぎ候間これははや上野の国佐野と
申す所に着きて候。この所にて宿
を借らばやと存じ候

シテ男 ツレ女 二人上 一セイ 拍子合ハズ

「浮世に渡る道ぞとて造る船橋の後の世
かくる頼みかな

シテサシ「往事渺茫として
何事も。残す夢の浮橋に数度
数添へて舟競ふ堀江の川の水際に
寄るべ定めぬあだ波の浮世に帰る
六の道。遁れかねたる心かな

○小謡

拍子二合 下ゲ中ゲ

恐しきものと古の蹟あるはると
思ひやる。前の世の。報のまゝに
生れきて。報のまゝに生れきて。心にか
けべくとても身の生死の海を渡るべき。
船橋と造らばや。二河の流れはあり
ながら科は十の道多き真の橋を
渡さうずや恵の橋を渡さうずや。

シテ 如何に客僧。橋の勧に入りて。御
通り候へ ワキ 見申せば俗體の身とし
て橋興立の志。返す返すもやさ
しうこそ候へ シテ これは俗とも覚えぬ
ものかな。必ず出家にあらねばとて
志のあるまじきにても候はず。まづ
勧に入りて御通り候へ ワキ 勧に候

参り候べし。さてこの橋はいつの御宇より渡されたる橋にて候ぞ

シテ「萬葉集の歌に。東路の佐野の舟橋取り放し。と詠める歌の心をば知ろしめし候はずや

ツレ「いやさやうに申せば恥かしや。身の古も浅間しや

シテ「こがれ沈みしこの川の。さのみは申さじさなきだに。苦多き三瀬川に浮む便の船橋を。渡してたばせ給へとよ

ワキ「げにげに親しさくれば。の物語。さては古りにし船橋の主を。助けんそのためか

シテ「殊更これは山伏の橋をば渡し給ふべし

ワキ「そも山伏の身なればとて。取りわき橋を

渡すべきか さのみな争ひ給ひそ
とよ。彼の優婆塞葛城や。祈りし
久米路の橋ならば たよりもあるべき
身ならねども。われも女のかづらき
の神 一言葉にてやむまじや。たゞ
幾度も岩橋の あだし御心かけ
給はぬ。さりながら よそにて聞く

○小謡

も葛城や。夜作る岩橋ならば。
渡らん事も難かるべし これハ長き
春の日の。長閑き水の船橋に。
して柱もいるまじや。徒に朽ち
果てんを造り給へ山伏 ○所は同じ
名の。所は同じ名の。佐野の渡りの
夕暮に。独りうち眺めてあり通りある

かん條鄕のころも春あり門の風の花吹き渡せ船橋の。法に住き来の道造り給へ山伏。峯々廻り給ふとも。渡らでいつくへ行かせ給ふべき。

平ワキ サラリ「さてさて萬葉集の歌に。東路の佐野の船橋取り放しゝ鳥の無しとさ二流に詠まれたるは。何と申したる謂はれて候ぞ

シテ「さん候それについて物語の候語つて聞かせ申し候べし。

語「昔この處に住みける者。忍び妻にあこがれ。両は門を隔てたれば。この船橋を通ひとして夜な夜な通ひけるに。二親この事を深く厭ひ。橋の板を取り放す。それをばへ夢にも

しらずしてかけて頼みし橋の上
よりかつぱと落ちて空しくなる妄
執と云ひ因果といひそのまゝ三途に
沈みもてゆく。紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢ
られて浮む世もなき苦の海にこそ
あらめ橋や盤石に押され苦を
受くるさらば沈みも果てずして。

魂は身を責むる心の鬼となり変り。
なほ恋草の事しげく。邪婬の思ひに
てかゝれ行く舩橋も古き物語の真の
身の上なり我が跡とひてたび給へ
シテ上 夕日漸く傾きて霞の空もかき
くらし。雲となり雨となる。中有の
道も近づくか橋と見えしも中絶え

ぬてつましく東路の佐野の舟橋
鳥はなし。鐘こそ響け夕暮の
空も別ぬなりけり空も別ぬ
なりけり　中入間

一声三人上手
待謡
○切迄囃子○
古りにし跡をあらためて古りにし
跡をあらためて三宝が持の行に
五道の罪も消えぬべき法の力ぞ。

有難き法の力ぞ有難き有難き、

シテ女カヽル上
出端
拍子不合ハズ
いかに行者有難や。徒に三途に沈
みし身あれども。法の力が舟橋の。
浮む身とある有難さよ

後シテ男上
如何に
行者われ猶し。ての妄執の故に
より浮みかねたる橋柱の。重き苦
患をとんせやさん。泣く涙。雨と降ら

あら渡りがは水増りあらば。帰り来るかよ
返れや返れあだ波の柱と戴く盤石の
苦患あれこれ人の涙まじや
見我身者発菩提の。功力を受けてはならく。奈落の底の水屑となりしも。我心者即身成佛。有難や
痛わしや
未だ邪婬の業深き。その執心を振り捨てて。猶々昔を懺悔し給へ
何事も懺悔に罪の雲消えて。眞如の月も出でつべし
五障の霞の晴れがたき。雲の夜の一時。胡蝶の夢の戯れに。いでいで姿を見えやさん
よしや吉野の山あらねど。

これも妹背の中川の。橋のとだえのありけるとは。いさ白波のよるごとに。ツレ上 通ひ馴れたる浮舟の

シテ ○仕舞 共にこがるゝ。思ひ妻。宵々に。通ひ馴れたる。船橋の。冴え渡る夜の月も半ば更け。静まりて。人もねよかし丑三つ。寒き川風も厭はじ

上ゲ歌 逢瀬の向ひの岸に見えたる。人影はそれか。心焼しや。頼もしや。互ひにそれぞとみえし中の。互ひにそれぞとみえし中の。橋と隔てゝ立ち来る波の。より羽の橋か鵲の。行きあひの間近くなりゆくまゝに。放せる板間を。踏みはづして。かつぱ

と落ちて沈みけり　東路の佐野の船橋取り放し。親しさくれば妹に逢はぬかも　執心の鬼となつて。執心の鬼となつて共に三途の川橋の。橋柱に立てられて悪龍の氣色に變り。程なく生死娑婆の妄執邪婬の悪鬼となつてわれと

身を責め苦患に沈むと行者の法味功力により眞如法身の玉橋の眞如法身の玉の浮める身とぞなりにける浮める身とぞなりにける。

源氏供養

概説

内十四巻ノ三

安居院法印、石山寺の観世音を信じゐけるが、或時参詣の途中一人の女性出で來り、我れ石山寺に籠りて源氏物語六十帖を書きしも、源氏に供養をせざりし科にて苦患を受け居れば、願はくば源氏の供養をなし、又我が跡をも弔ひて給はれと言ひ、其の身の紫式部なることを暗示して見えずなりぬ。仍て法印供養をなせるところに式部の霊現れ、報謝にとて紫の薄衣にほやかに一曲を舞ひけるが、式部は観世音化現して源氏物語に世の夢なることを人に知らせんとの方便ならんと、法印愈佛徳を仰ぎけり。

此曲閑カニ品好ク謡フベシ但シ重クナルヲ好マズ
小書　脇留　舞入

役別		装束附
ワキ	僧安居院法印	角帽子　着附小格子　水衣　白大口　腰帯　珠数　扇（又ハ着流シ僧ニモ）
ワキツレ	従僧二人	角帽子　着附無地熨斗目　縷水衣　白大口　腰帯　珠数　扇（又ハ着流シ僧ニモ）
前シテ	里女	面若女　鬘　鬘帯　着附摺箔　唐織着流（紅白段ノ類）　鬘扇
後シテ	紫式部	面若女　鬘　鬘帯　着附摺箔　長絹（紫地）　緋大口　腰帯　鬘扇　前折烏帽子着テモ　経懐中

季	三月	曲柄	三番目（鬘物）
所	近江國滋賀郡石山寺	稽古順	一級

源氏供養

禅竹氏信作

ワキ僧 ワキツレ二人 次第上 ヨワク 拍子ニ合

衣も同じ苔の道。衣も同じ苔の道。石山寺に参らん。

ワキ詞 シッカリ

これは安居院の法印にて候。われ石山の観世音を信じ。常に歩みを運び候。今日もまた参らばやと思ひ候。

道行三人上

時も名も花の都を立ち出でて。花の

都を立ち出でて。嵐につるゝ夕波の。白河おもて過ぎ行けば。音羽の瀧をよそに見て。関のこなたの朝霞。されども残る有明の。影もあなたに鳰の海。げに面白き。げに面白き景色かな。さゝ波や志賀辛崎の一つ松。塩焼かねども浦の波たゝ。たつてぞ水の煙なれ。たつてぞ水の煙なれ。

シテ「あらうなう安居院の法印に申すべき事の候。

ワキ「法印とはこなたの事にて候。何事にて候ぞ。

シテ「われ石山に籠り。源氏六十帖を書きしるし。亡き跡までの筆のすさみの

形見となりたれども。かの源氏に
終に供養をせざりし科により。
浮む事なくさむらへば。然るべくは
石山にて。源氏の供養をのべ我が
跡とひてたび給へとの事申
さんとてこれまで参りて候
ワキ「これは思ひもよらぬ事を承り候

ものかな。さりながら易き間の事
供養をとげのべ候べし。さて誰と志して
回向申し候べき　シテ「まづ石山に参りつゝ
源氏の供養をのべ給はゞ。その時われ
も現れて。ともに源氏を弔ふべし
ワキ「嬉しやそれこそ奇特なれ。いで源氏
と書きし人　シテ「恥かしやその身は浮

ワキ「世のたとなれども　ワキ「名をば埋まぬ
苔の下　シテ「石山寺に立つ雲の
ワキ「紫式部にてましますか　シテ「恥かし
やがて出づるか紫の出づるか紫の
雲もそなたか夕日影さてそれ
とも名告りえずかき消すやうに失
せにけりかき消すやうに失せにけり　中入

ワキカヽル上「さて石山にまゐりつゝ念誦を勤め
こと終り夜も更け方の鐘の聲
心も澄めるをりふしに　ワキツレ「ありつる源氏
の物語眞しからぬ事なれども
ワキ「供養をのべて紫式部の　ワキツレ「菩提を
深く弔ふべきなり　上三人「さなきだに思へども
あだし世のつゆと思へどもあだし

世の夢にうつろふ紫のさある花も
一時の。あだにも消えし古の光源氏
の物語。聞くにつけてもその誠頼
少き心かな頼少き心かな

後シテ女上　一セイ　拍子合ハズ

松風も。散れば形見となるものを。
思ひし山の下紅葉　地　名も紫の色
に出でて　シテ上　見えん姿の恥かしや

ワキ　カヽル上

かくて夜も深更になり。鳥の聲とさ
まり。心凄きをりふし。燈火のかげと
見れば。さも美しき女性の。薄衣の
そばを取り。影のごとくに見え給ふ
夢か現かおぼつかな　シテ　移ろひ
やすき花色の。襲の衣の下こがれ。
紫の色こそ見えね枯野の萩もとの

あらまし事通らバ名告らずと
しろしめされずや　ワキ上「紫の色に出でずとも
あらましの言葉の末と心得ぬ紫
式部と申すか　シテ「恥づかしながら
我が姿　ワキ「その面影は昨日見し
シテ「姿に今も変らねバ　ワキ「互に心を
シテ「おきもせず　寝もせで明かすて

夜半の月も心せよ石山寺の鐘の聲。
夢も数添ふ枕の前。消えてハそれか
燈火の光源氏の跡とはん光源
氏の跡とはん。　シテ「あら有難の御
事や。何とか布施をまゐらせ候べき
ワキ「いや布施などの思ひもよらず候。さて
もこの世の夢のうちの昔に返す詞

の袖。今舞うて見せ給へ。シテ「恥かしながらさりとては。仰せをばいかで背くべき。いでいでさらば舞はんとて。

ワキカヽル上「固よりその名も紫の。シテ「色珍しき薄衣の。ワキ「日も紅の扇を持ち。

シテ「恥かしながら弱々と。ワキ「あはれ胡蝶の。シテ「ひと遊。

次第同上「夢のうちなる舞の袖。

地「夢のうちなる舞の袖。現に返すよしもがな。シテ上「花染衣の色襲。地「紫匂ふ袂かな。

クリシテ「それ無常といつぱ。目の前なれども形もなし。一生夢の如し。誰あつて百年を送る。槿花一日の栄に同じ。

シテサシ上「ここに数ならぬ紫式部。頼みをかけて石山寺。悲願を頼み籠り

○サシ曲独吟

○切近囃子

居てこの物語を筆に任す　されども終に供養をせざりし科により。妄執の雲も晴れがたし　今逢ひ難き縁に向つて心中の諸願を發し。一つの巻物に写し。無明の眠りを覚ます。南無や光源氏の幽霊成等正覚

クセ　下

拍子三合

そもそも桐壺の夕の煙速やかに法性の空に至り。帚木の夜の言の葉は終に覚樹の花散りぬ。空蝉の。空しきこの世を厭ひて夕顔の露の命を観じ。若紫の雲の迎末摘花の臺に座せば。紅葉の賀の秋の落葉もよしやただ。たまたま佛意に逢ひながら。榊葉のさして

○仕舞

往生を願ふべし　シテ上 花散る里に住むとても愛別離苦の理免れ難き道とかや。たゞすべからく生死流浪の須磨の浦を出て四智圓明の明石の浦に澪標いつまでもありなんたゞ蓮生の宿をかり。菩提の道を願ふべし松風の吹くとても。

業障の薄雲。晴るゝ事更になし。秋の風消えずして。紫磨忠孝の藤袴。上品蓮臺に。心をかけて誠ある。七寶荘厳の。眞木柱のもとに行かん。梅か枝の。匂ひに移る我か心藤の裏葉に置く露の。その玉鬘かけしばし朝顔の光頼まれず。　ウシテ上 あだ

に栴檀の陰にて。寄生木名も高き。官位を。東屋の内に籠めて。楽しみ栄えを浮舟に譬ふべし。かやうに。これも蜻蛉の身なるべし。夢の浮橋をうち渡り。身の来迎を願ふべし。南無や西方弥陀如来。狂言綺語を。ふり捨てゝ紫式部が後の世を。助け給へともろともに。鐘うち鳴らして回向も既に終りぬ。

ロンギ上「げにも面白や舞ひ人の。名残今はなく鳥の夢をも返す袂かな

シテ上「光源氏の御跡を。弔ふ法の力にて。われも生まれん。蓮の花の宴は頼もしや

地上「げにや朝は秋の光

夕には影もなし。朝顔の露。稲妻の影。いづれかあだならぬ。定めなの浮世や。よくよく物を案ずるに。よくよく物を案ずるに。紫式部と申すは。かの石山の観世音。仮にこの世に現れて。かかる源氏の物語。これも思へば夢の世と。人に知らせん御方便。げにありがたき誓ひなり。思へば夢の浮橋も。夢の間の言葉なり。夢の間の言葉なり。

花筺

概説　内十四巻ノ四

継體天皇未だ御位に即かせ給はずして大跡部の皇子と称し、越前國味眞野といへる所におはしける頃、照日の前とて御寵愛深く召使はれたる女あり。天皇御即位ありて御暇を賜りたる時、朝夕御手に馴れし花筺と御文とを下されけり。

照日の前は御別れを悲みて狂氣し、都に上る途にて紅葉の行幸に會ひ、天皇の御目に留りて御車近く召されけるが、不圖携へ持てる花筺を叡覧あらせられ、深くあはれに思召されて昔の如く召し使はんとの宣旨を傳へられしかば、狂女はいたく喜びて御供に随ひ都に参りけりとぞ。

此曲総ジテ晴ヤカニ確カリト謡フベシ但シ荒ク謡フハ悪シ
小書　大返シ　筐ノ傳　女御留

役別		装束附
ワキツレ	御使ノ男	着附熨斗目　素袍上下　小刀　文ト花籠ヲ持ツ
前シテ	照日ノ前	面若女　鬘　鬘帯　着附摺箔　唐織着流シ
子方	継體天皇（謡ナシ）	初冠（纓）　着附縫箔　単狩衣　指貫　腰帯（紋付）　扇持
ワキ	供奉官人	着附厚板　法被　白大口　紋付腰帯　扇
ワキツレ	輿舁二人	着附厚板　白大口　紋付腰帯　扇指ス
ツレ	侍女	面連面　鬘　鬘帯　着附摺箔　唐織着流　花籠持
後シテ	照日ノ前	面若女　鬘　鬘帯　着附摺箔　唐織（右肩脱グ）　笹（文付ル）　扇

季	九月	曲柄	四番目（畧三番目）（狂女物）
所	前・越前國今立郡味真野村　或ハ大和國磯城郡安倍村池ノ内辺	稽古順	一級

花筐

観阿彌清次作

ワキツレ男　サラリ

これは越前の國味真野と申す
所に御座候男大迹の皇子に仕へ
申す者にて候。さても都より御使
あって。武烈天皇の御代を。味真
野の皇子に御譲あり。御迎の
人々まかり下り御供申し今朝疾く

御上洛にて候。（気ヲカヘ）さる間その程御寵
愛あつて召しつかはれて候。照日の前
と申す御方。この程御暇にて御
里に御座候が。かの御方へ俄の御上
洛につき。御玉章と朝毎に御手
に馴れし御花筐とを参らせられ候と。
某に持ちて参れとの御事にて候

程に。唯今照日の御里へと急ぎ候。
（気ヲカヘ）あら嬉しや。これへ御出で候よ。これなる
申し候べし。いかに申し候。（シテ女）何事にて
候ぞ。（ワキツレ　サラリ）我が君の都より御迎下り。
御位に即せ給ひ。今朝疾く御上
りにて候。これなる御文と御花
筐とを。確かに参らせよとの御事

にては。これは御覧候へ。シテ さてハ我が
君御位に即かせ給ひ。都への御上り
返す返すも御めでたうてそはへ
とよ。さりながら。此年月の御名残
いつの世にかは忘るべき。あら御名残
惜しやされども思し召し忘れず
して。御玉章を残し置かせ給ふ

事のありがたさよ。急ぎ参らせ
ん。われ応神天皇の尊苗を
継ぎながら。帝位を履む身にあら
ざれども。天照太神の神孫なれば。
毎日に伊勢を拝し奉りし。その
神感の至りにや。群臣の選みに出
されて。いまはなれゆく雲の上。廻り

あふべき月影と秋の頼に残す
かり頼めたゞ独り別れし月影の
忘れ雲居にへだてありとも
書き置き給ふ水茎の跡に残るぞ
悲しき君と住む程だにありし
山里に程だにありし山里に独り
残りてなにのつれなき春もすぎ

また咲く松の嵐もいつしか花の跡
とておかしき御花筐玉章と
抱きて里に帰りけり抱きて里に
帰りけり君の恵も高照す
君の恵も高照す紅葉の御幸早
めん忝くもこの君は應神天皇
五代の御末男大迹の皇子と申しゝが

當年御即位をさまりて継體天皇と申すなり
ワキツレ サラリ されば治る御代の御影日の本の名もあひにあふ
ワキ 詞カヽル 大和の国や玉穂の都に
ワキツレ 上ニツメ 今宮造あらたなり
ワキ 上 立豪 朗カニ 拍子ニ合 萬代の恵も久し富草の。恵も久し富草の。種も榮ゆく秋の空。露も時雨も時めきて四方に色そふ初紅葉。松も千歳の縁にて。常盤の秋に廻りあふ。御幸の車早めん御幸の車早めん

後シテ女上 一セイ ヨワク 拍子ニ合ハズ 朗カニ いかにあれなる旅人。都への道教へてたべ。物狂とや物狂も思ふ心のあればこそ問へ。など情なく教へ給はぬぞや
ツレ女上 サラリ よしなう人の教へずとも都への

道しるべにてそ候へ。あれ御覧候へ雁の
渡り候。シテ「何雁の渡るとや。げに今
思ひ出したり。秋にはいつも雁の。南へ
渡る天つ空。ツレ「空言ならぬ君が住む。
都とやらんもそなたなれば。シテ「聲を
しるべの便の友と。ツレ「われもたのむの
雁こそ連れて都路の。しるべなれ

シテ「その上名にし負ふ蘇武が旅雁。地「玉
章をつけし南の都路に。われらも
ともに連れて行け。シテ「宿かりがねの
旅衣。「飛び立つばかりの心かな
シテサシ「君が住む越の白山知らねども。行き
てや見まし。あしびきの大和は続く白
雲の高間の山のよそにのみ見てや

○小謡

止みなん及なき。雲居はいづく御影
山の本なれや。大和なる。玉穂の都
にいそぐなり。さゝ近江の湖なれや。
みづからよしなくも。及ばぬ恋に浮
舟のう。こがれ行く。袂としのぶの
摺衣。袂としのぶの摺衣。涙も色
か黒髪の。あかざりし別路のあと

に心の浮れきて。鹿の起き臥し堪へ
かねて。なほ通ひゆく秋草の野くれ
山くれ露わけて。玉穂の宮に着き
にけり。玉穂の宮に着きにけり
○平上
時しも頃は長月や。まだき時雨の色
薄き紅葉の御幸の道の辺にて。非
形もと戒め面々に御幸の御さきもと

清めけり シテ「さなきだに都に慣れぬ鄙人の。女といひ狂人といひ。さこそ心の楢柴の。風も乱るる露霜の。御幸の前に進みけり 和「不思議やなその。さま人に変りたる。狂女と見えて見苦しやとて。官人立ち寄り払ひけり ツレ「あら悲しや君の御

白「そこ退き候へ

花筐を打ち落されて候ふはいかに シテ「何と君の御花筐を打ち落されたるとや。あら忌まはしの事や ワキ「いかに狂女。持ちたる花籠を君の御花筐とて。渇仰するぞ。そも君とは誰が事を申すぞ シテ「事新しき問事かな。この君ならで日の本に。また異

君のましますべきか　ツレ上 われらが身の
狂人なればしらじと思し召さるゝか。
忝くもこの君は。應神天皇五世
の御孫。過ぎし頃迄此國の味眞
野と申す山里に　シテ 男大迹の皇子
と申しゝが　ツレ 今この國玉穗の都にて
シテ 繼體の君と申すとかや　ツレ されば

○独吟
○仕舞

かほどにめでたき君の　シテ 御花筐を、
懼もおさで、　ツレ 。うち落し給ふ
人こそ　シテ われよりも猶物狂よ
上歌 拍子ニ合 恐ろしや。恐ろしや。世は末世に及ぶ
といへども日月は地に落ちず。まだ散
りもせぬ花筐を荒けなやあら
かねの土に落し給ふ天のとがめ

も忽に罰あたり給ひてわが如くなる狂気して友の物狂とはなれさせ給ふな人にはなれさせ給ふな、かやうに申せば。かやうに申せばたゞ現なき花筐の言とやおぼすらん。この君未だその頃は。皇子の御身なれど、朝毎の御勤に花を

手向け禮拝し。南無や天照皇太神宮。天長地久と。称へさせ給ひつゝ御手を合させ給ひし御面影の身に添ひて忘れ形見までもなつかしや恋しや

陸奥の安積の沼の花かつみ。かつ見し人を恋種の。しのぶ捩摺誰ゆゑぞ乱れ心は君のため

てゝはまてたゞ隔ある月の都の名
のみして独子もうつされず。手に
も取られず。たゞ徒らに水の月を
望む猿のごとくにて。叫び伏して
泣き居たり叫び伏して泣き居た
り。いかに狂女。宣旨にてあるぞ。御
車近う参りて。いかにも面白う

狂うて舞ひ遊びの袖へ。叡覧あるべき
との御事にてあるぞ。急いで狂ひ
候へ。嬉しやさては及びなき。御
影をも拝みやすべき。いざや狂はん
諸共に　御幸に狂ふ囃子こそ
御前をも拂ふ袂なれ。○忝き御
たとへあれども。いかなれば漢王の。李

夫人の御別を歎き給ひ。朝政も
きびて。夜のおとゞも徒らにたゞ
思の涙衣の袂を濡す。又李
夫人の紅色の花の粧衰へて。萎る
露の床の上。塵の鏡の影を恥
ぢて。終に帝にまみえ給はずして
去り給ひ

○仕舞

○帝深く歎かせ給ひ
つ。その御形を甘泉殿の壁に寫
しわれも畫圖に立ち添ひて。明
暮歎き給ひけり。されどもなか
〳〵御思ひの増れども。ものいひ交
す事なきを。深く歎き給へば。李少
と申す太子の。ひとけなくましま
すが。帝に奏し給ふやう
李夫

人の本はこれ上界の、嬖妾くわすゐてくの仙女あり。一旦人間に生まるゝとはいへども終に本の仙宮に帰りぬ。泰山府君に申さく、李夫人の面影を。暫くこゝに招くべしとて。九花帳の中にして反魂香をたき給ふに夜更け人静まり。風凄しく。

月秋なるに、それかと思ふ面影の、あるかなきかにかげろへば。なほいや増しの思ひ種。葉末に結ぶ白露の。手にもたまらで程もなく、たゞ徒に消えぬれば。漂渺悠揚としては又尋ぬべき方なき、悲しさのあまりに。李夫人の住み給ひし。甘泉殿を

立ちさらず。空しき床をうち拂ひ。古き衾古き枕一人袂をかたしく

ワキ 宣旨にてあるぞ。その花筐を参らせ上げ給へ

シテ上 餝りの事にて胸ふさがり。心空なる花筐を。恥しながら参らする

ワキ 帝かこれを叡覧あつて。疑もなき田舎にて。御手に別れし御花筐。同じく留め置き給ひし御玉章の恨を忘れ。狂氣を止めよ本の如く。召し使はんとの宣旨なり

シテ げにありがたや御恵。直なる御代に帰るしるしも。思へば保ちし筐の德

ワキ かれこれともに時にあふ

シテ 花の筐のなを

とめて、ワキ恋しき人の手馴れし
ものを、シテ形見と名づけそめし
事、ワキこの時よりぞシテ始りける

○小謡
上歌 拍子ニ合
ありがたやかくばかり。情の末を
白露の。恵に漏れぬ花筐の。御
かごとましまさぬ君の御心ぞあり
がたき
キリ上 御遊も既に時過ぎて。

御遊も既に時過ぎて。今は還
幸なし奉らんと。供奉の人々。御車
やりつけもみだるゝ花散る御
前を払ひ。狂ふや袂も山風に
誘はれ行くや玉穂の都。誘はれゆく
や玉穂の都に。盡きせぬ契ぞあり
がたき。

富士太鼓

概説　内十四巻ノ五

花園天皇の御時、内裏にて七日の管絃の御會を催されんとして、天王寺の浅間といへる楽人を召されけるが、此時住吉にも富士といへる上手ありて役を望み都に上りけり。帝此由を聞召され、古き歌にも「信濃なる浅間の嶽も燃ゆるといへば富士の煙のかひやなからん」とあれば、浅間の方優るならんと興ぜさせ給へり。浅間此のことを洩れ聞き富士が己と其技を争はんとせるを憎み之を殺害せり。富士の妻は一子を伴ひて都に上り、斯くと知りていたく歎き悲み、太鼓ゆゑに夫は非業の最後を遂げたれば、太鼓こそ夫の敵も同じとて打ち狂ひて歸りけり。

此曲哀傷ノ意ヲ含ムト雖モ優ニ美シク後ハ晴ヤカニ謡フヲ好トス
小書　現之樂

役別	裝束附
ワキ　官人	風折烏帽子　着附厚板　白大口　長絹又ハ單狩衣　腰帯　扇 太刀（間持ツ）
子方　富士ノ子（女）	鬘　鬘帯　着附箔　唐織着流シ
シテ　富士ノ妻	面深井　鬘　鬘帯　着附箔　無色腰巻　水衣（浅黄、萌黄ノ類）　縫入腰帯　女笠　無色扇　物着ニテ鳥兜　舞衣着ル

季	九月	曲柄	四番目（畧三番目）
所	京都	稽古順	三級

富士太鼓（フジダイコ）

世阿彌元清作

ワキ官人〽これは萩原の院に仕へ奉る臣下なり（用カニ）さても内裏に七日の管絃の（気ヲカヘ）御座候により天王寺より浅間と申す楽人これの双なき太鼓の上手にて候を召し上せられ太鼓の役を仕り候所に又住吉より富士と申す

楽人これも劣らぬ太鼓の上手にて
わが管絃の役を望み罷り上りて候。
この由聞こし召され富士浅間何れも
面白き名なりさりながら古き歌に。
信濃なる浅間の嶽も燃ゆるといへば。
富士の煙のかひやなからんと聞く
時は名こそ上なき富士なりとも。

あつぱれ浅間はまさるべきものをと
勅諚ありしにより重ねて富士と申
す者もなく候。さる程に浅間この由
を聞き憎き富士が振舞かなとて。
かの宿所に押し寄せあへなく富士
を討つて候。実に不便の次第にて候。
定めて富士がゆかりの者来る事候は

まじ。若し尋ねまゐりて候はゞ。形見をも遣はさばやと存じ候

シテ女子方女二人上　雲の上なほ遙なる。雲の上なほ遙なる富士の行方を尋ねん

シテカヽル上　これは津の国住吉の楽人。富士と申す人の妻や子にて候。さても内裏に七日の管絃のましますにより。天王寺より楽人召されて参る由を聞き。わらはが夫も太鼓の役。世に隠れなければ望みやせんそのために都へ上りし夜の間の夢。心にかゝる月の

下音　雨。身を知る袖の涙かと。ゆかしかねたる夜もすがら。

上音　寝られぬまゝに思ひ立つ。寝られぬまゝに思ひ立つ。

○小謡

雲居やそなた故郷は。あしあれや、住吉の松の隙より眺むれば月落ちかゝる山城もえや近づけば笠をぬぎ。八幡に祈掛帯の。結ぶ契の夢ならで。現に逢ふや男山都に早く上りけり都に早く上りけり。

シテ 急ぎ候ほどに都に上りて候。この處に富士の御行方を尋ねばやと存じ候。△いかに案内申し候

シテ これは富士がゆかりの者にて候。富士に引き逢はせられてたまはり候へ

ワキ 富士がゆかりとやすの何處にあるぞ

シテ これに候

ワキ さてこれは富士がための何にてあるぞ

シテ 恥しながら妻や子にて候

ワキ あら

富士は討たれて候よ　シテ「何と富士が討たれたると候や　ワキ「なかなかの事。富士は浅間に討たれて候　シテ上「さればこそ思ひ合せし夢の占重ねて問はゞなかなかに。浅間に討たれ情なく　地「さしも名高き富士は、あだ煙とはなりぬらん今は歎くにそのかひも

なき跡に残る思ひ子とも見るからにいとゞなほ進む涙はせきあへず

ワキ「今は歎きてもかひなき事にてあるぞ。これこそ富士が舞の装束よ。それ人の歎きには形見に過ぎたる事あらじ。これを見て心を慰め候へ

シテ中「今までは行方も知らぬ都人の。

わらはをも田舎の者と思しめして。
偽り給ふと思しめさば。真によしなき
鳥甲月日も変らぬ装束の鏡に
何もあらばこそ。痛はしやかの人出
で給ひし時。みづから申すやう天
王寺の楽人なるにてよりたり。御
身の勤役なきにまかして集れども下

とて上手と計るに似たるべし。その
上御身は当社地給の楽人にて。明神
に仕へ申す上の何の望のあるべきぞ
と申ししかども。知らぬ顔にて出で給ひし
下歌同 カヘテ 拍子二合
その面影は身にそへど真の主は
上歌同
亡き跡の忘れ形見ぞよしなき
かねてより。かくあるべきと思ひあひ

かくあるべきと思ひなば。秋猴が手
を出し。猩猩が涙にても留むべ
きものを今更に。非ならぬ身をと
恨みかこち。歎くぞ哀なる歎くぞ
哀なりける　あら恨めしやな夢に
姫。あれは夫の敵の候ぞやいざ討
たう　あれは太鼓にてこそ候へ思の

餘りは御心乱れ。條なき事を仰
せ候ぞや。あら浅ましや候　引立て
の人の云ひ言や。あかで別れし我が
夫の失せし事も太鼓故。ただ
恨めしきは太鼓なり。夫の敵よ
いざ討たう　げに理なり母御前
て。別れし事も太鼓ゆゑ。さあらば

親の敵ぞかし。討ちて恨を晴らすべし、わらはがためはつまの敵。いざやねらはん諸共に　男の姿狩衣は。あの具あれや鳥甲　恨の敵討ちとさめ、鼓を咎は　埋まんとて　寄するや岡の聲立てゝ秋の風より。すさましやうてやうてやと攻鼓

○切返　囃子

あらさそこりのおく音やあ　あなも思へば腹たちや。あなも思へば腹たちや、けしたる姿は引きかへて心言葉も及ばれぬ。富士が幽靈来ると見えて　よしあの恨やもさかしこ太鼓うちたるや

○独吟
○仕舞

持ちたる撥をば剣と定め。持ちたる

撥をバ剱と定め。瞋恚の焔の太鼓の
烽火の。天にあがれバ雲の上人。眞
の富士颪に絶えずもまれて猨
猴の梢。四方へざつと散るかと見
えて。花衣さす手も引く手も。
伶人の舞あれバ。太鼓の役は。固よ
り聞ゆる。名の下空しからず。たぐ

ひあやなう。かしや「げにや女人の
悪心の。煩悩の雲晴れて五常楽
をうち給へ「修羅の太鼓の打ちや
みぬ。この君の御命ぞ千秋楽と打
たうよ「まづ千代や萬代と民
も栄えて安穏に「太平楽を打
たうよ。日も既に傾きぬ。日も既に

傾きぬ。山の端を眺めやりて招き
返す扇の手の。嬉しや今こその。
思ふ敵の討ちたれ。討たれて音をや
出すらんわれは晴るゝ胸の煙。富
士が根を晴せば涙こそ上なかり
けれ。これまでなりや人々よ。これ
までなりや人々よ。暇申してさら

ばと伶人の姿鳥甲。皆脱ぎ捨てゝ。
われと心乱れ髪。乱れ髪。かゝる思ひの
忘れじと。又立ち返り太鼓こそ
憂き人の形見なりけれと。留め置
きてぞ帰りける跡に留め置きてぞ
帰りける。

版權所有
複製不許

大正拾年三月十日印刷
同年三月十五日發行

訂正著作者 廿四世 觀世元滋

發行兼印刷者 京都市上京區二條通麩屋町東北角 檜常之助

發行所 東京市神田區錦町一丁目拾番地 檜大瓜堂

印刷所 東京市四谷區傳馬町貳丁目 江川堂

終